

## 大学生における教室での着席位置および 受講動機と私語頻度との関係

水子学\*<sup>1</sup> 高尾堅司\*<sup>1</sup>

### 要 約

本研究では、大学における授業中の私語の規定因として、着席位置と受講動機を取り上げ、着席位置によって、受講動機と私語頻度との関係にいかなる異同があるのか検討した。大学生234名を対象に質問紙調査を実施し、私語頻度、着席位置、受講動機について評定を求めた。その結果、前列の着席者は、私語内容が授業と関係しているか否かに関わらず、教養の習得を目的として受講している人ほど私語頻度は低く、就職・進学等を目的としている人ほど私語頻度が高いことが示された。また、中列の着席者は、担当教員への好感を理由に受講している人ほど、授業と無関係の私語頻度が低く、資格等の受験資格取得を目的として受講している人ほど授業と関係のない私語頻度が高いことが示された。さらに、後列の着席者は、担当教員への好感を理由に受講している人ほど、授業と無関係の私語頻度が低く、教養の習得を目的として受講している人ほど授業と関係のある私語頻度が高いことが示された。これらの結果は、各着席位置における受講動機と私語頻度との関係について、着席位置によって各々の私語頻度を規定する受講動機が異なることを示唆している。

### 1. 緒言

1990年代以降、我が国における大学教育の現場では、授業中に発生する学生の私語が常態化し、深刻な教育問題として注目を集めるようになった。東京大学大学院教育学研究科の大学経営・政策研究センターが全国の大学教員を対象に実施した調査によると、授業の阻害要因のうち、携帯電話も含め、私語が授業の障害であると回答した教員は全体の6割以上にのぼることが報告されている<sup>1)</sup>。授業中の私語は、長年にわたり、多くの大学教員を悩ませ続けていると言える。なお、海外において、大学生の私語を問題とした研究が見当たらないことから、授業形態等の違いにより海外では私語が問題になることが少なく、大学生の私語は我が国特有の現象であると考えられる。

授業中の私語について考える場合、まず問題となるのが、「私語」という用語が指す範囲の広さである。ト部と佐々木は、概念的定義としての私語は、「授業中に学生どうしで交わされる私的な話」であるが、「教師の話を少し聞き逃した学生が、そっととなり

の学生に確認する」ものから「授業中終始、教師の話をして、さらに教師の存在そのものを無視して雑談の花を咲かせる」ものまでその範囲は広いと述べている<sup>2)</sup>。また、大学教員と学生とでは、授業中のどのような発話を私語とみなすかの基準が異なり、さらに、教員間でもその基準に齟齬があることが明らかにされている<sup>3)</sup>。このように、私語について、未だ一致した定義は確立されていない。しかし、私語の内容が授業に関係するか否かによって、各々の私語頻度を規定する要因に違いが認められることが報告されており<sup>4)</sup>、私語発生の規定因を明らかにするためには、幅広い内容を網羅した定義を採用することが適切であると考えられる。本研究では、「授業中に生じる全ての発話」という最も広範な定義に従い、私語とみなされる可能性のある全ての発話を扱う。

授業中の私語発生には、受講生の規範意識や個人特性、教室環境など多くの要因が関係する。これらの要因のうち、私語内容や私語頻度を規定する要因の1つとして、受講生の教室における着席位置が注目されている<sup>3,5-7)</sup>。例えば、出口は、授業と無関係

\*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科  
(連絡先) 水子学 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学  
E-mail : mizuko@mw.kawasaki-m.ac.jp

の私語頻度は縦方向の着席位置によって異なり、教室の後方に着席している学生ほど相対的に私語頻度が高い傾向があることを明らかにしている<sup>4)</sup>。また、大学生を対象に私語の多い授業の特徴について調査した結果、私語の多い授業のうち、94.7%は座席指定のない、受講生が着席位置を自由に選択できる授業であることが示されている<sup>3)</sup>。教室の後部座席は、教卓から距離が離れているため、教員に気付かれにくく、仮に気付かれたとしても個人が特定されにくいと認識することによって、私語の頻度が高くなると考えられる。反対に、前部座席での私語は教員に気付かれやすく、かつ個人が特定されやすいと認識するため、私語が抑制される可能性がある。大学教員を対象に実施された調査研究<sup>3)</sup>においても、私語発生を未然に防ぐ方法として、26.5%もの教員が「座席に関するもの」を挙げており、環境要因の1つである着席位置は私語発生の規定因として重要な役割を果たしていると考えられる。

さらに、受講動機も私語発生の規定因であることが確認されている。受講動機とは、大学生が履修する授業を選択する基準の1つである。受講動機には、授業内容に対する興味関心といった積極的なものから単位取得のみを目的とする消極的なものまで、さまざまな種類の動機が考えられる。座席選択と怠学行動の規定因について調べた研究<sup>7)</sup>では、授業に対する興味が低い大学生は、教室後方の座席で私語を多発していることが明らかにされている。また、私語をする理由について、大学生の自由記述内容を分析した研究では、出席をとるから受講する、空いた時間を埋めるために受講するなど、受講目的や動機が不明確である場合、私語が増えることが指摘されている<sup>8)</sup>。さらに、大学生を対象に私語をした授業の受講動機について調査した研究によると、「単位をとるためだけ」と回答した大学生は77.7%であり、次に「出席をとるためだけ」が42.4%と続いている<sup>3)</sup>。

このように、着席位置と受講動機は私語発生の規定因として位置づけられている。また、この両要因は完全に独立しているのではなく、関係性を有していることが明らかにされている。大学生の座席選択行動に関する研究<sup>9)</sup>では、卒業単位確保のために授業に出席する学生は、教室の後方に着席する傾向が強く、強い受講意欲をもつ学生は教室前方に着席することが報告されている。したがって、私語発生の規定因である受講動機は、学生の着席位置によって異なる可能性がある。しかし、着席位置によって、受講動機が私語頻度をどのように規定するかについては十分に検討されていない。

そこで、本研究では、大学における授業中の私語

の規定因として、着席位置と受講動機を取り上げ、着席位置によって、受講動機と私語頻度との関係にいかなる異同があるのか検討する。

## 2. 方法

### 2.1 調査対象者

Z県内のある私立大学における心理学関連の専門科目（選択科目）1科目の受講生234名を対象に質問紙調査を実施した。このうち、未記入の項目が1項目以上あった4名を除く、230名（男性81名・女性149名：平均年齢19.1歳（SD=1.90））を分析に用いた。なお、当該科目は、心理学を専攻する者を含め、医療、福祉の各分野を専攻する計6学科の受講生が履修していた。科目担当教員は、毎回の授業時に出席カードを配布し、出席状況を確認していた。

### 2.2 調査手続き

2009年7月の講義終了後に調査を実施した。調査実施に先立ち、本調査は無記名であり、個人情報には厳重に保護されるとともに、回答内容が成績に影響を与えることは一切ないこと、協力しない場合は白紙のまま提出するよう説明した。同様の説明は、質問紙の表紙に記載した。受講生に一斉に質問紙を配布し、その場で回答を求め、回収した。なお、本研究は川崎医療福祉大学倫理委員会（承認番号17-112）の承認を得た。

### 2.3 質問紙の構成

#### 2.3.1 私語の頻度

出口と吉田<sup>10)</sup>が作成した私語の頻度に関する尺度の計8項目を使用した。この尺度は、「授業内容に関する私語（4項目）」、「授業内容とは直接関係のない私語（4項目）」で構成されている。なお、出口と吉田<sup>9)</sup>は5段階で回答を求めているが、本研究では、調査を実施した講義の初回授業から調査時点までを通して、私語をどの程度行ったかについて、「全く行わなかった（1点）」「あまり行わなかった（2点）」「少し行った（3点）」「頻繁に行った（4点）」の4段階評定で回答を求めた。

#### 2.3.2 教室での着席位置

調査を実施した教室は、361名が収容可能な扇型の階段教室であり、扇の要の部分に教卓が配置されていた。教卓の背後に出入口があり、教卓と最前列の机との距離は約180cmであった。座席指定はなかった。出口<sup>5)</sup>を参考に、調査を実施した講義を対象に、初回授業から調査時点までを通して最も頻繁に座っている着席位置を回答するよう求めた。回答に際しては、教室全体の座席配置を縦3列×横3列の9ブロックに分割した図（図1）を提示し、各ブロッ

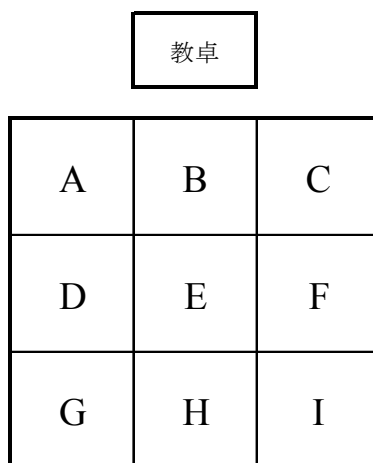


図1 着席位置を測定するための教室の座席空間ゾーン

クから1つ選択するよう教示した。なお、分析の際には、A～Cを前列、D～Fを中列、G～Iを後列とし、着席位置を3分類して用いた。

### 2.3.3 受講動機

島田<sup>3)</sup>を参考に、調査を実施した講義に出席している理由について「大学生としてふさわしい教養を身につけるため」、「自己実現のため(就職、進学等)」、「卒業に必要な単位数をとりこぼさないため」、「この講義の単位を得ないと受験資格が得られないため(教員試験等)」、「講義の担当教員に好感が持てるため」の5項目を作成した。各項目に対して「全くそう思わない(1点)」「あまりそう思わない(2点)」「どちらでもない(3点)」「ややそう思う(4点)」「非常にそう思う(5点)」の5段階評定で回答を求めた。なお、以下では、これら5項目の各々について、順に「教養の習得」、「就職・進学等」、「卒業単位数の修得」、「各種資格の受験資格取得」、「担当教員に対する好感」と表記する。

## 3. 結果

### 3.1 着席位置ごとの着席者数の分布

表1に、前列、中列、後列の各ブロックにおける着席者の度数および相対度数を示した。中列が最も

着席者数が多く、続いて後列、前列の順であった。なお、9つのブロックでは、中列のEブロックが最も着席者数も多く、前列のCブロックおよび後列のIブロックが最も少なかった。

### 3.2 私語頻度を測定する尺度の因子構造

出口と吉田<sup>10)</sup>と同様の因子構造となるか確認するために、因子分析を行った。まず、各項目の平均値±1SDを基準に得点分布を検討したところ、天井効果および床効果は認められなかった。そこで、全8項目に対して、最尤法による因子分析を行った。固有値の減少推移は、3.52, 1.63, 0.73, …, であり、解釈可能性を考慮した結果、2因子解が妥当であると判断した。単一の因子への負荷量が0.40未満であることを除外基準とし、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行った結果、全ての項目が採用された。累積寄与率は53.68%であった。因子分析の最終解を表2に示した。

第1因子は、“授業に関係のない冗談や笑い話をした”など、授業内容とは直接関係のない私語に関する4項目から構成されたことから、「授業と無関係の私語」と命名した。第2因子は、“先生の話で聞き逃したことについて話した”など、授業内容に関係す

表1 前列、中列、後列の各ブロックにおける着席者の度数および相対度数

	A	B	C	計
前列	16 ( 7.0)	23 (10.0)	12 (5.2)	51 (22.2)
	D	E	F	計
中列	30 (13.0)	48 (20.9)	31 (13.5)	109 (47.4)
	G	H	I	計
後列	21 ( 9.1)	37 (16.1)	12 (05.2)	70 (30.4)

注) 括弧内の数値は相対度数

表2 私語頻度を測定する尺度の因子分析結果

項目	因子		M	SD
	I	II		
<b>I. 授業と無関係の私語</b>				
4 授業に関係のない冗談や笑い話をした	.92	-.05	2.20	0.95
1 授業や勉強とは関係のない用事について話した	.84	.05	2.47	0.93
8 今受けている授業とは関係のない, 他の授業や勉強に関する話をした	.67	-.03	2.13	1.01
7 授業に対する不満について話した	.65	.04	2.01	0.99
<b>II. 授業に関係する私語</b>				
3 先生の話で聞き逃したことについて話した	-.07	.90	2.74	0.85
2 授業の内容に関する疑問点について話した	-.11	.70	2.66	0.86
6 板書でよく読めないところについて話した	.19	.51	2.58	0.91
5 授業に関する意見・感想を話した	.21	.44	2.25	0.89
因子間相関		—	.39	

る私語についての4項目から構成されたことから、「授業に関係する私語」と命名した。なお、先行研究<sup>9)</sup>では、「授業に対する不満について話した」という項目の負荷量が、両因子ともに0.40以上であったため、分析から除外されていた。しかし、本研究では第1因子に対する負荷量のみ0.40以上であったため、そのまま分析に用いた。その他の因子構造は、先行研究<sup>10)</sup>と同様であることが確認できた。各因子の内的整合性を検討するために、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出したところ、第1因子( $\alpha = .85$ ), 第2因子( $\alpha = .75$ )であり、いずれも高い内的整合性が示された。そこで、各因子を構成する項目の平均値を算出し、各々の下位尺度得点とした。

### 3.3 各着席位置における私語頻度および受講動機の差異

表3に、着席位置(前列, 中列, 後列)ごとの各

私語頻度および各受講動機の平均値および標準偏差を示した。なお、各々の平均値に性差が認められるかどうか確認するために、 $t$ 検定を行った。その結果、全ての平均値について性別による有意差は示されなかった。そこで、以下では、男女全体で分析を行うこととした。

まず、着席位置によって、各私語頻度の平均値に違いがあるか確認するために、1要因の分散分析を行った。その結果、「授業と無関係の私語」において、有意な主効果が認められた( $F(2, 227) = 11.25, p < .001$ )。Tukey法による多重比較検定を行った結果、有意水準1%で、後列の着席者は、前列および中列の着席者に比べ、私語頻度の平均値が有意に高かった。なお、「授業に関係する私語」に関しては、有意な主効果は認められなかった。

次に、着席位置によって、各々の受講動機の平均

表3 着席位置ごとの各私語頻度および各受講動機の平均値および標準偏差

	前列 (n=51)	中列 (n=109)	後列 (n=70)
私語頻度			
授業と無関係の私語頻度	1.87(0.74)	2.15(0.82)	2.53(0.71)
授業と関係のある私語頻度	2.41(0.76)	2.63(0.58)	2.55(0.69)
受講動機			
教養の習得	3.57(1.12)	3.38(1.15)	3.33(1.15)
就職・進学等	4.31(0.95)	3.97(1.11)	3.80(1.03)
卒業単位数の修得	4.22(1.12)	4.34(0.88)	4.41(0.77)
各種資格の受験資格取得	3.69(1.41)	3.56(1.46)	3.40(1.31)
担当教員に対する好感	3.25(1.20)	2.85(1.19)	2.94(1.14)

注) 括弧内の数値は標準偏差

値に違いがあるか確認するために、1要因の分散分析を行った結果、「就職・進学等」において、有意な主効果が認められた ( $F(2, 227) = 3.57, p < .05$ )。

Tukey 法による多重比較検定を行った結果、有意水準5%で、前列の着席者は後列の着席者に比べ、「就職・進学等」の平均値が有意に高かった。なお、その他の4項目については有意な主効果は認められなかった。

### 3.4 各着席位置における受講動機と私語頻度との関係

各着席位置における受講動機および私語頻度の各々の変数間の関係を検討するために、3つの着席位置ごとに各受講動機と各私語頻度との間の相関係数を求めた (表4)。

「授業と無関係の私語頻度」については、前列と中列に共通して、「教養の習得」との間に有意な負の相関 (前列:  $r = -.29, p < .05$ ; 中列:  $r = -.22, p < .05$ )、「各種資格の受験資格取得」との間に有意な正の相関 (前列:  $r = .31, p < .05$ ; 中列:  $r = .23, p < .05$ ) が認められた。また、中列と後列は「担当教員に対する好感」との間に有意な負の相関 (中列:  $r = -.36, p < .001$ ; 後列:  $r = -.45, p < .001$ ) が示された。

一方、「授業と関係のある私語頻度」に関しては、後列の「教養の習得」との間にのみ有意な正の相関 ( $r = .39, p < .01$ ) が認められた。

これらの結果から、着席位置の違いによって、各々の私語頻度には異なる受講動機が関係していることが確認できた。

なお、各着席位置における5つの受講動機間の相関係数の範囲は、0.00から0.49であり、これらの変数間に極めて高い相関は認められなかった。

次に、受講動機の5変数のうち、各着席位置における私語頻度にとって相対的に重要な変数を明らかにするために、着席位置ごとに5つの受講動機を説明変数、各々の私語頻度を目的変数とした重回帰分析を行った。表5に各着席位置における変数間の標準偏回帰係数を示した。

その結果、「授業と無関係の私語頻度」に関して、前列では受講動機のうち「教養の習得」( $\beta = -.47, p < .01$ ) および「就職・進学等」( $\beta = .40, p < .05$ ) が説明力を持つことが示された。同様に、「授業と関係のある私語頻度」についても、前列では「教養の習得」( $\beta = -.48, p < .01$ ) および「就職・進学等」( $\beta = .43, p < .05$ ) が説明力を持っていた。私語内容が授業と関係しているか否かに関わらず、前列の着席者

表4 着席位置ごとの各受講動機と各私語頻度との間の相関係数

		1	2	3	4	5	6	7
1 授業と無関係の私語頻度	前列	—	.64***	-.29*	.17	-.05	.31*	-.11
	中列	—	.33**	-.22*	-.04	-.13	.23*	-.36***
	後列	—	.26*	-.05	-.05	.03	.22	-.45***
2 授業と関係のある私語頻度	前列	—	-.22	.23	-.16	.09	.10	
	中列	—	-.02	.09	-.18	.19	.01	
	後列	—	.39**	.11	.01	.19	.06	
3 教養の習得	前列	—	—	.49***	.16	-.06	.32*	
	中列	—	—	.31**	.23*	-.17	.47***	
	後列	—	—	.40***	.07	.23	.43***	
4 就職・進学等	前列	—	—	—	-.24	.14	.18	
	中列	—	—	—	.05	.38***	.17	
	後列	—	—	—	-.06	.40***	.19	
5 卒業単位数の修得	前列	—	—	—	—	.08	.17	
	中列	—	—	—	—	.07	.25**	
	後列	—	—	—	—	-.01	.13	
6 各種資格の受験資格取得	前列	—	—	—	—	—	.00	
	中列	—	—	—	—	—	-.14	
	後列	—	—	—	—	—	-.05	
7 担当教員に対する好感	前列	—	—	—	—	—	—	
	中列	—	—	—	—	—	—	
	後列	—	—	—	—	—	—	

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

は、教養の習得を目的として受講している人ほど私語頻度は低く、就職あるいは進学等を目的としている人ほど私語頻度が高いことが示された。

また、「授業と無関係の私語頻度」について、中列では、「担当教員に対する好感」( $\beta = -.30, p < .01$ )および「各種資格の受験資格取得」( $\beta = .22, p < .05$ )が説明力を持っていた。この結果は、中列の着席者は、担当教員への好感を理由に受講している人ほど、授業と無関係の私語頻度が低く、資格等の受験資格取得を目的として受講している人ほど授業と関係のない私語頻度が高いことを示している。

一方、「授業と関係のある私語頻度」に関して、中列では「卒業単位数の修得」( $\beta = -.22, p < .05$ )および「各種資格の受験資格取得」( $\beta = .23, p < .05$ )が説明力を持つことが示された。中列の着席者は、卒業単位数の修得を目的として受講している人ほど、授業と関係のある私語頻度が低く、資格等の受験資格取得を目的として受講している人ほど授業と関係のある私語頻度が高いことが確認できた。

さらに、「授業と無関係の私語頻度」に関して、後列において説明力をもっていた変数は「担当教員に対する好感」( $\beta = -.50, p < .001$ )のみであった。これは、後列の着席者は、担当教員への好感を理由に受講している人ほど、授業と無関係の私語頻度が低いことを示している。一方、「授業と関係のある私語頻度」に対しては、「教養の習得」( $\beta = .45, p < .01$ )のみが説明力を持っていた。後列の着席者は、教養の習得を目的として受講している人ほど授業と関係のある私語頻度が高いことが示された。

#### 4. 考察

着席位置による私語頻度の差異については、授業

と無関係の私語に関して、後列の着席者は、前列および中列の着席者に比べ、頻繁に私語を行っていることが明らかになった。これは、出口<sup>5)</sup>と同様の結果であり、授業と無関係の私語頻度は、教室における縦方向の着席位置によって異なることが確認できた。教室の後部座席は、教員に気付かれにくい、個人が特定されにくいという認識につながりやすく、その結果、躊躇なく授業に関係のない私語が発生しやすくなるのではないかと考えられる。

一方、授業と関係のある私語頻度に関しては、着席位置による差異は認められず、着席位置に関係なく広範囲(頻度の平均値: 2.41~2.63)に発生していることが明らかになった。島田の調査結果によると、どのようなおしゃべりを私語とみなすかについて、大学生の53.4%が「授業内容に直接関連していないおしゃべり」、39.8%が「授業を妨げるおしゃべり」と回答している<sup>3)</sup>。つまり、大学生は、授業を妨げない範囲で、聞き逃した講義内容や板書で読めないところを周囲の受講生に尋ねるといった行為を私語とみなさず、むしろ必要不可欠な学習行為であると認識している可能性がある。そのため、授業と関係のある私語は、着席位置に関係なく発生するのではないかと考えられる。今後、授業と関係のある私語を行うことについて大学生がどのように認識しているのか調べる必要がある。

各着席位置における受講動機と私語頻度との関係については、着席位置によって各々の私語頻度を規定する受講動機が異なることが明らかになった。前列においては、私語内容にかかわらず、私語頻度に対して教養の習得が負の説明力を持ち、就職・進学等が正の説明力をもっていた。前列の着席者は、自らが求めている教育内容にどの程度合致した授業を

表5 各私語頻度を目的変数とした重回帰分析結果(標準化偏回帰係数)

説明変数	目的変数					
	授業と無関係の私語頻度			授業と関係のある私語頻度		
	前列 (n=51)	中列 (n=109)	後列 (n=70)	前列 (n=51)	中列 (n=109)	後列 (n=70)
教養の習得	-.47**	-.01	.15	-.48**	.03	.45**
就職・進学等	.40*	-.06	-.09	.43*	-.01	-.10
卒業単位数の修得	.11	-.07	.08	-.02	-.22*	-.02
各種資格の受験資格取得	.21	.22*	.20	-.00	.23*	.13
担当教員に対する好感	-.05	-.30**	-.50***	.18	.09	-.10
<i>Adjusted R<sup>2</sup></i>	.19*	.13**	.21**	.13*	.04	.12*

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

注) 多重共線性の指標である VIF (分散拡大因子) は全て 1.70 未満

受講するかによって私語頻度が規定されると考えられる。なお、就職・進学等は、長期的目標に関する動機であるため、この動機が高いことが必ずしも授業に対する具体的な目標に結びつかず、結果として私語頻度を促進させたことが考えられる。

中列に関しては、授業と関係のある私語頻度に対して各種受験の受験資格取得が正の説明力を持ち、卒業単位数の修得が負の説明力をもっていた。また、授業と無関係の私語頻度に関しては、各種受験の受験資格取得が正の説明力を持ち、担当教員に対する好感が負の説明力をもっていた。ただし、各種受験の受験資格取得および卒業単位数の修得の標準偏回帰係数は小さく、実質的な説明力は弱いものと考えられる。

後列では、担当教員に対する好感が、授業と無関係の私語頻度に対して負の説明力をもっていた。同様の結果は中列においても認められている。後列および中列の着席者のうち、教員に対する好感を理由に受講している者ほど授業と無関係な私語頻度が抑制されると考えられる。川西<sup>7)</sup>は、教員への好意が私語を抑制することを明らかにしており、本研究でも同様の知見が得られた。教員に対する学生の肯定的な認知や感情が、私語抑制にとって有効であり、教員と学生との間に良好な関係を構築することが、私語抑制対策の手段の1つになり得る可能性が示唆された。また、後列では、授業と関係のある私語頻度に対して教養の習得が正の説明力をもっていることが示された。後列の着席者の中でも、教養の習得を目的として受講している者は授業に関係する私語

を頻繁に行いながら授業に参加していると考えられる。教養の習得を目的にしているにもかかわらず、なぜ後列の着席しているのかについて、さらに検討する必要がある。

なお、着席位置ごとの2つの私語頻度間の相関係数を比較すると、前列は、中列および後列と比べ、相対的に高い正の相関が認められた。前列の着席者について、2つの私語頻度に対して説明力をもっていた受講動機が共通していた結果の背景には、私語頻度間の相関の高さが関係していると考えられる。

本研究の結果から、着席位置ごとに私語頻度を規定する受講動機を明らかにすることによって、私語発生の機序を解明するための手がかりを得る可能性が示唆された。ただし、本研究で得られた結果は、1科目の受講生を対象としたデータから得られたものである。大学の授業は、必修科目と選択科目の区別、基礎教育科目と専門科目の区別、受講生数、教室構造の違いなど多種多様な形態を有しており、今後、さまざまな授業形態に関するデータを収集する必要がある。また、調査実施から約10年が経過した現在、当時よりも、携帯電話やスマートフォンといった情報通信機器が大学生に広く普及している。これらの情報通信機器は、大学生同士のコミュニケーションのあり方や講義中の私語のあり方にも影響を及ぼす可能性がある。再度、私語に関する調査を実施し、本研究の結果と比較することで、大学生の私語発生の機序が、時代の変化とともにどのように推移しているのかについて検討することができると考えられる。

#### 謝 辞

本研究を行うにあたって、調査に協力して下さった皆様に心より感謝申し上げます。本研究は、平成19年度川崎医療福祉大学医療福祉研究費の助成によるものです。

#### 付 記

本研究は、岡山心理学会第57回大会で発表した内容に加筆・修正したものである。

#### 文 献

- 1) 東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策研究センター：大学教育の現状と将来—全国大学教員調査—。  
<http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/resource/kyoin-chosa.pdf>, 2010. (2018.2.23確認)
- 2) 卜部敬康, 佐々木薫：授業中の私語に関する集団規範の調査研究—リターン・ポテンシャル・モデルの適用—。教育心理学研究, 47(3), 283-292, 1999.
- 3) 島田博司：私語への教育指導—大学授業の生態誌2—。玉川大学出版部, 東京, 2002.
- 4) 鈴木恵, 戸塚智美, 澤田和美, 椎野雅代：看護学生の私語の頻度と規範意識・社会的スキル・属性との関連—看護短期大学2年次後期終了時の検討—。応用心理学研究, 41(1), 56-64, 2015.
- 5) 出口拓彦：私語に対する規範意識・集団規範の認知と頻度の関連—公的・私的自意識および座席位置に着目して—。藤女子大学紀要, 43, 第Ⅱ部, 13-18, 2005.
- 6) 出口拓彦：大学の授業における私語と視点取得・友人の数・座席位置の関連—「私語をすること」「私語をされること」

- の相違に着目して一. 藤女子大学紀要, 44, 第Ⅱ部, 45-51, 2007.
- 7) 川西千弘: 女子大学生の授業中における座席選択と怠学行動の規定因. 応用心理学研究, 42(3), 247-256, 2017.
  - 8) 冷水啓子: 授業中の私語—「心理学01」受講生による自己分析結果—. 桃山学院大学人間科学, 20, 277-297, 2000.
  - 9) 織田揮準, 森仁美: 教室における座席選択行動と学習態度. 日本教育工学雑誌, 6(4), 137-145, 1982.
  - 10) 出口拓彦, 吉田俊和: 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連—大学生生活への適応という観点からの検討—. 社会心理学研究, 21(2), 160-169, 2005.

(平成30年6月11日受理)



## Relationships between Seating Position in Classroom, Motivation for Taking Classes, and Frequency of Whispering in College Students

Manabu MIZUKO and Kenji TAKAO

(Accepted Jun. 11, 2018)

Key words : whispering, seating position, motivation for taking classes, college students

### Abstract

This study aims to analyze seating position and the motivation for taking classes as determinants of whispering during college classes through a questionnaire survey of 234 students. The study examined differences by seating position in the relationship between the motivation for a student taking a class and the frequency of whispering. Through a questionnaire survey of 234 college students, the frequency of whispering, seating position, and students' motivation for taking classes were assessed. The survey results indicated that, whether or not the topic of the whispering was related to the class itself, the frequency of whispering was low for those seated in the front row among students taking a class for the purpose of knowledge acquisition. On the other hand, whispering frequency was high for those seated in the front row among students taking a class for finding work or going on to the next stage of education. In addition, middle row students who took a class out of affinity for the teacher undertook less whispering unrelated to the class. The higher the tendency for students to take the class for qualification acquisition purposes, the higher the amount of whispering unrelated to the class. In the back rows, the higher the tendency for the student to take the class out of affinity for the teacher, the lower the amount of whispering unrelated to the class. Among back row students taking the class for knowledge acquisition, the amount of whispering related to the class was lower. With regard to the relationship between the student's motivation for taking the class and the frequency of whispering in each seating position, these results suggest that the motivation for taking the class, which determines the varying frequencies of whispering, is different depending on seating position.

Correspondence to : Manabu MIZUKO

Department of Clinical Psychology

Faculty of Health and Welfare

Kawasaki University of Medical Welfare

Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : [mizuko@mw.kawasaki-m.ac.jp](mailto:mizuko@mw.kawasaki-m.ac.jp)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.28, No.1, 2018 195 – 203)